

「黄いろのトマト」について

黄, 英
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16012>

出版情報 : *Comparatio*. 5, pp.59-67, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

「黄いろのトマト」について

黄 英

童話「黄いろのトマト」は宮沢賢治の数多くの生前未完成作品中の一篇である。「私」が小さい頃博物館の剥製の蜂雀から聞いた話を、成人になって回想するという形式を採っている。他の有名な作品ほど論じられてはいない作品であるが、賢治文学に通底する重要なモチーフ——楽園、子供／大人、異文化間接触、などの問題を内包していると考えられる。本稿はこれらの問題に焦点をあて、宮沢賢治が夢見た理想郷の一つの在り様を考えてみたい。

—

『新校本宮沢賢治全集』（以下『新校本全集』と略称する）第9巻校異篇によると、「黄いろのトマト」の現存草稿は25枚ある。そのうち、冒頭の10枚はB形10 20 イーグル印原稿用紙で、作者の農学校での生徒であった川村俊雄による筆写稿に、作者が手入れしたものである。ただし、作者の赤インクによる推敲は第4頁右半までであり、残りの15枚は作者による清書後手入稿である。

また、草稿に付いている洋紙表紙には題名の左下からややうすい鉛筆で

博物局十六等官

キュステ誌

と記入がある。

1940年12月の十字屋版全集第5巻、1956年5月の第1次筑摩版全集第7巻及び1967年12月の第2次筑摩版全集第7巻では、本文タイトルの左下に〈博物局16等官 レオーノ・キュステ誌／宮澤賢治訳述〉とあった。1973年9月の筑摩版『校本宮沢賢治全集』（以下『校本全集』と略称する）第8巻になると、その2行の文字は本文ではなく、ただ表紙に書いてあるのみという事情が明らかになり、本文題目左下の注記が削除された。が、1979年7月の筑摩版『新修宮沢賢治全集』（以下『新修全集』と略称する）第9巻の場合はその注記を考えに入れることが有意義であるとされ、本文冒頭に掲げられた。ただし、〈宮澤賢治訳述〉の部分は作者のものではないため採用されていない。1995年6月の筑摩版『新校本全集』第9巻は前掲の『校本全集』の形式を踏襲した。本稿は『新校本全集』第9巻の本文をテキストとして考察を行うことにする。

なお、未完成作品であるので、内容に不整合が残っている。186頁で「ペムベルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでゐたよ」とあるのに、187頁では「『おとなはそこらに居なかったの。』わたしはふと思ひ付いてさうたづねました。『おとなはすこしもそこらあたりになかった』』となっている。この内容の混乱はこの部分の筆写稿に欠落があり、前述の作者の手入が中断していることに由来しているものと見られている。具体的に前記『新校本全集』第9巻の校異篇を見ると、186頁のところは「ペムベルはお父さんもおっかさんもない男の子だ。ネリはお母さんもお父さんもない女（後1枚ぐらい欠落）ペムベルとネリは小さな丘の麓に住んでゐた」という部分が削除され、先の「毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでゐたよ」が書き加えられている。

前述のように、作品は完成した形ではないため、こうした内容上の不整合は作者が意図的に用意したとは思われない。恐らく作者はこのあたり両親が健在したように改稿しようとしたが、何らかの理由で中断したのであろう。

また、作品の成立時期もはっきりしていない。ただ『新校本全集』第9巻の校異篇によると、前述の川村俊雄の筆写時期は本人の記憶によれば、氏が花巻農学校を卒業した大正13年の4月～5月の間

になされている。ただし、前述のように川村の筆写に作者がまた手を加えており、また、後半の 15 枚は川村の筆写ではないこともあるので、川村の筆写時期が即ち作品の成立時期とは判断できない。

また、前記の校異篇によると、表紙の左端近くの上方に、赤インクの大きな字で

第一集

と記されている。そして、本作品は童話「おきなぐさ」裏表紙の鉛筆によるメモ〈花鳥童話集〉11 篇のなかに含まれている。以上の事実を考えあわせると、小沢俊郎「宮沢賢治童話類集メモ考」¹で、「昭和五年の時点になって自らの作品群を振り返ったとき、改めて低学年向のものと判断された作を『第一集』にまとめ」たとの推定も首肯できるだろう。つまり、大正末期に一度完成を見せたが、後年（昭和 5 年前後）になって、また推敲と改訂を加えたと言えるだろう。ただし、以上はあくまでも推定にすぎず、確定的な成立時期はいまだにはっきりしない次第である。

二

ペムペルとネリの物語を中心に検討を加えてみたいが、まず、兄妹二人が家を出る前の生活の様子を見てみたいと思う。

兄妹二人の住む場所の設定について、前記の『新校本全集』第 9 巻校異篇を見ると、「小さな山の」から「小さな丘の麓に住んでみた」へ、そして、それらの記述が全部削除されたという経緯が見られる。しかし、兄妹二人がその後町に出るために、幾つかの小山や流れを越えなければならなかったということから見れば、二人の家は町から相当離れたところにあると言えよう。

このように都会から遠く離れたところで、兄妹二人で農作業に従事し、休みの時は一緒に歌を歌ったりして、愉快に暮らしている。物質的にも精神的にも充足した様子である。果樹園もあるので、エデンの園を彷彿とさせる。勿論兄妹が農作業に従事することからも分かるように、二人はエデンの楽園にいるアダムとイブとは違って、神の存在が見られず、あくまでも自力で生活を賄っている。

が、大人不在で、ただ兄妹二人だけで、楽しく暮らしていることについて、松田司郎は「このお話は妹トシとの死別を契機として、あるいはそれに触発されて、「詩人」の《秘密》を告白したととれないだろうか。（中略）妹と二人でいることの〈罪の意識〉がたどたどしく描かれている」²と、作者賢治とその精神的な道連れである妹トシとの関係に注目し、肉体的ではなく、精神的な〈近親相姦〉のモチーフを見出した。

確かに、二人だけの世界がエデンの園のエロティックな匂いを漂わせると言っても無理はない。創世神話において、兄妹による結婚と子供の出産によって、氏族や国家が誕生するパターンが多い。日本のイザナギとイザナミ二神の創世の神話もその例である。賢治作品にも双子や兄妹二人の登場はしばしばあり、そこに妹トシとの関係が反映されていることがほぼ通説となっている。本作品においても、妹トシの影が落とされていることは否定できない。

だからといって、それが精神的な〈近親相姦〉となるのだろうか。むしろ天沢退二郎が言うように、兄妹二人は「両性的と言うより前性的であ」³ろう。つまり、二人は「性差以前のイノセンスの世界」⁴にいるのであろう。

¹ 小沢俊郎「宮沢賢治童話類集メモ考」（栗原敦・杉浦静編『小沢俊郎宮沢賢治論集 1 作家研究・童話研究』 有精堂 1987、3）254 頁

² 松田司郎『宮沢賢治の童話論——深層の原風景』（国土社 1990、12）150 頁

³ 『新編・銀河鉄道の夜』解説（新潮文庫 1989、6）

⁴ 押野武志「ロマン派の子供観の諸問題——賢治童話の中の子供たち」（日本近代文学会『日本近代文学』第 56 集 1996、10）110 頁

以上述べてきたように、ペムペルとネリは両親が居らず、外界と関係せずに自給自足の原始的な農耕生活を営んでいた。それでも、イノセンスの二人だけの世界は愉快そのものであった。

次に、二人の住んでいるところの具体的な様子を見てみよう。

二人の家は青いガラスで出来ている。また、働く場の水車場は赤いガラス、納屋は黄色のガラスで出来ている。その鮮明な色彩、ガラスの透明なイメージ、さすがに童話の世界と感ずるのは無理もないが、ただ童話というジャンルに片付けていいのか。ここでは、ガラスをキーワードにその背後にあるものを探っていきたい。

ガラスが世に現れたのは人類の発祥とほぼ時を同じくする、6000年以上の昔の西洋であった。しかも、当時ガラスは不透明だった。無色透明なガラスは紀元前200年ごろ出現したのである。その後、いろいろのプロセス、特に産業革命をへて、製造技術が発展し、さまざまなガラスが作り出され、人々の生活に普及した。一方、古代日本にも当時のガラス製造技術が伝来した、が、長い間ガラス製品は貴重品として、一部の人の物だった。

日常生活でガラス製品が当たり前のように使われ始めるのは、明治時代に入ってからである。明治政府の殖産興業政策のもとで、官営ガラス工場が設置され、ガラス食器や、工芸品などが作られ、自給自足し得るようになり、やがて輸出するまでに進展していったが、板ガラスに関しては技術が困難なため、実験は殆ど失敗だった。本格的に板ガラスの製造が開始したのは、明治末期頃だった。それはベルギー式人口吹円筒法を輸入したことに始まる。当時の技術は未だ幼稚なもので、生産も少量であった。大正に入って欧米の斬新な機械が輸入され、大きな発展を見せた。また、厚板ガラスの製造は大正8年日米共同出資で工場を設立した頃からであった⁵。

作品に出てくる兄妹二人のガラスの家、ガラスの納屋などは色彩のついたものであり、しかも、「厚いガラス」で出来ているのである。色彩ガラスの技術は古いが、建物全体が厚いガラスで作られるのを可能でさせるには、近代の厚板ガラスの技術が必要であろう。その技術は今現在の視点から見れば、ありふれたものかもしれないが、作品成立の大正末期という時代から見ると、まだ斬新なもの、もしかして時代を先取るものかもしれない。作者のガラスに関する発想の背後には、日本近代産業の発達や西洋文明の吸収などの事実が存在していると言えよう。

また、二人は農作業もやっている。畑に小麦のほか、キャベツやトマトも植えていた。これらの農産物は、今現在は毎日の食卓に欠かせないありふれたものであるが、作品成立当時は相当違うイメージであった。

まず、キャベツから見てみよう。

キャベツの原産地はヨーロッパの大西洋沿岸で、結球性と不結球性の2種類に大別される。今日のキャベツは結球性のそれが品種改良され、進化したものである。キャベツが日本に初渡来したのは宝永年間で、不結球のものと思われる。結球性キャベツの渡来はやはり明治になってからである。岩手や北海道に産地が出来、東京出荷が行われるようになったのは、明治末期ごろである。

その後、文明開化の流れのなかで、キャベツの需要が段々拡大し、大正時代になると、篤農家による栽培法や採種技術の研究が盛んになり、導入から順化の時代へと移った。それでも、戦前は輸入種子やその採りかえし種子の利用が多く、生産は西洋野菜の域を出なかった。⁶

一方、トマトは南米のアンデス高原に起源し、16世紀の前期にヨーロッパに導入された。導入当初は観賞用で、野菜として普及し始めたのは19世紀に入ってからである。日本に導入されたのは18世紀の初期で、あくまでも好笑的栽培の域を出なかった。

⁵ 宮崎雄一郎『ガラス』（ダイヤモンド社 1950、9）3～26頁参照

⁶ 藤枝国光『野菜の起源と分化』（九州大学出版会 1993、7）123～125頁参照

その栽培が普及しはじめたのは明治の末期になってからである。当時の栽培面積はただ 50 町歩にも満たなかった。大正になってイギリス系の 'Best of All' が導入され、トマトの普及に弾みをつけたが、酸味が強く、トマト臭も強かったために消費はそれほど伸びず、キャベツと同じく西洋野菜の域を出なかった。主要野菜の仲間入りをしたのは昭和になってからである⁷。

以上述べてきたように、キャベツやトマトは明治政府の西洋文化摂取政策の一環として、西洋から導入され、大正になって、だんだん普及しかけたが、まだ「西洋野菜」の域を出ず、人々に珍しがられている段階である。作品に出てくるトマトの品種、ポンデローザ、レッドチェリーも実在の品種である。作品成立時期の大正時代の流行品種ではなく、明治時代に一度導入されたことがあるもので、特にポンデローザは昭和になって、主流品種になったものである⁸。大正時代という時代背景を考えれば、畑にキャベツやトマトを栽培するのは相当ハイカラなものであろう。

以上二つの視点からペムベルとネリのいる場所について検討してきた。兄妹二人は両親のいない、子供だけがいるイノセンスの世界で、原始的な自給自足の農耕生活を楽しむ一方、その家は近代科学技術や産業の発展がベースとなったガラスで出来て、畑には西洋野菜であるキャベツやトマトを植えているというハイカラな面もある。それは原始と現代の両方のイメージの入り混じった世界である。また、重要なのはそこでの生活は二人にとって非常に愉快的なものだということである。

三

二人は愉快地暮らしていたが、なぜ、そこを出ていったのだろうか。

ある夕方二人は羊歯の葉に水をかけてたら、遠くの遠くの野はらの方から何とも云へない奇体ないゝ音が風に吹き飛ばされて聞こえてくるんだ。まるでまるでいゝ音なんだ。(中略)二人は如露の手をやめて、しばらくだまって顔を見合せたねえ、それからペムベルが云った。

『ね、行って見やうよ、あんなにいゝ音がするんだもの。』

ネリは勿論、もっと行きたくてたまらないんだ。

『行きませう、兄さま、すぐ行きませう。』

このように、二人はなんとも言えない奇妙な音に魅せられ、その音について、樂園を出ていったのである。単純に言えば、子供の好奇心が二人に樂園を出させたのであるが、外界とほぼ隔離した世界で暮らしていた二人にとって、外からのいままで聞いたことのない「奇体な」音はどんなに魅力的であろう。今までの閉鎖的な生活環境が、二人の好奇心を普通以上に引き出した。

が、二人は外界に好奇心を覚えながら、怖さも感じる。ペムベルが妹のネリと出る約束をしたとき、『大丈夫あぶないことないね』と身の安全を確認してから果樹園を出たのである。また、途中でサーカスの団体に出あって、今まで見たことのない黒人や「四角な生物」を見て、「恐かったけれどまた面白かった」、「めづらしかった」と感じ、遠い町までついていった。このように好奇心と恐怖感がペムベルとネリの内心で葛藤しながら、ついには好奇心が支配権を握った。

こうして、ペムベルとネリは自分たちの生活や出自に疑問を持つことはなく、二人だけでも充分楽

⁷ 前掲『野菜の起源と分化』52～53頁参照

⁸ 清水茂監修『野菜園芸大事典』（養賢堂 1977、1）883～887頁 熊沢三郎『改著・総合 蔬菜園芸各論』（養賢堂 1971、3）108～117頁参照

しく暮らしているところ、奇妙な音に興味をそそられ、つい楽園を出てしまった。前述のように性差以前の子供の世界であるため、二人だけの生活に何のおかしさも感じないことは不思議ではなからう。また、楽園を出た理由については、〈好奇心〉以上のものは何も語られなかった。むしろ、〈好奇心〉以上のものを探るよりも、あえてそれ以上語られなかったこと自体に注目すべきではなからうか。それはもとの世界への否定ではないことを示していると考えられるだろう。

次はペムベルとネリが家を出て、何に会い、その出会いによって、何がもたらされたかについて考えていきたい。

二人だけの閉鎖的な世界から出て、まず、さまざまな人達と出会った。その中に、「光る赤革の長靴をはき、帽子には鷲の毛やなにか、白いひらひらするものをつけてゐた。鬚をはやした」大人も居れば、「ペムベル位の頬のまっかな眼のまっ黒な」かわいい親切な子供も居る。また、恐いけれど面白い黒人、サーカスを見にくる男女老幼、暴行を振るう木戸番人もいる。皆それぞれであるが、二人にとっては、別世界の他者であることには変わりがない。

また、人間との出会いはその人間が所属する文化との出会いでもある。ペムベルたちがどうしても見たいサーカスは西洋文明を吸収する近代文明開化の象徴であり⁹、木戸銭は近代貨幣商品文化の象徴であると言える。こうして、ペムベルたちは自分たちの原始的、自給自足的な文化と全く異なる文化と出会ったのである。以下は具体的な出会い方を検討してみたい。

まず、サーカス会場の入り口での場面を見てみたい。

ペムベルはだまって、二つのトマトを出したんだ。番人は（中略）顔が歪んでどなり出した。『何だ。この餓鬼め。人をばかにしやがるな。トマト二つで、この大入の中へ汝たちを押し込んでやってたまるか。失せやがれ、畜生。』

そして、トマトを投げつけた。（中略）その一つはひどくネリの耳にあたり、ネリはわっと泣き出し、みんなはどっと笑ったんだ。ペムベルはすばやくネリをさらふやうに抱いて、そこを逃げ出した。

みんなの笑ひ声が波のやうに聞こえた。

まっくらな丘の間まで逃げてきたとき、ペムベルも俄かに高く泣き出した。

この場面について、中村三春は「ここで行われたのは、（中略）異文化間接触であり、さらにその接触に伴う軋轢はむしろ二つの文化間の対立以上に、「みんな」の“笑い”という隔絶の表現によって、異文化間におけるコミュニケーションの不全（下線——筆者注）という事態をまざまざと語るものである」と異文化間のコミュニケーションという概念を提出し、解釈を行った。

コミュニケーションは、その原義はキリスト教で信者が神との霊的な交わりを享受することを意味する神聖な言葉であったが、現代では多様な意味で使われている。そのうち、人々が互いに世界観、価値観、態度、信念などを〈共有〉する行為を意味するのが基本的な解釈である¹⁰。前述のように、ペムベルたちが所属する文化と外の文化とは全く異なったもので、共通する部分がないため、両者が

⁹ 『大百科事典 6』（平凡社 1985、3 初版発行 1995年印刷）169～171頁のサーカスの項によれば、サーカスは動物の芸、人間の曲芸で構成される見世物である。起源が古く、18世紀からヨーロッパ各地で流行っていた。日本古代もあったものの、明治になって、文明開化の流れで、外国留学帰りの芸人達によって、西洋サーカスの種目が積極的に取り入れられたという。

¹⁰ 古田暁監修 石井敏・岡部朗一他著『異文化コミュニケーション・キーワード』（有斐閣 1990、3、30）46頁

接触する際に、いざこざが生じ、コミュニケーションがうまく出来なかったわけである。しかし、交流がうまく出来なかったとはいえ、両者の接触によって必ず何かが起こるはずであろう。次はこの問題を探っていきいたい。

家を出るまでは、ペムペルたちはずっと子供しかいない世界で暮らしていた。自分の親や、自分の出自などに疑問を持つことはなかった。杉浦静が言うように「二人の生活は大人の世界と接触せず、純真な子供の世界が保たれている」¹¹のである。家を出て、途中サーカス団に出会い、そこには大人も居るが、ペムペルたちを相手にしてくれず、態度は冷淡だった。対照的に、サーカス団の子供は「ペムペルを見て一寸唇に指をあてゝキスを送った」のだ。この大人と子供の全く違った態度に、ペムペルたちは大人と子供の身体的な違いのほかに、何かを感じ始めただろう。

その後、ペムペルたちは「白い四角な家」の動物について町に出てきた。サーカス団は町でテントを張り、ショーをはじめた。ペムペルたちも見たくて入ろうとしたが、皆の真似をして、金を出すかわりに黄色のトマトを差出したところ、木戸番にひどく怒られ、その黄色のトマトを投げつけられた。そのとき、木戸番が怒鳴った言葉は『何だ。この餓鬼め。人をばかにしやがるな。(下線——筆者注) トマト二つでこの大入の中へ汝たちを押し込んでやってたまるか。失せやがれ、畜生。』である。

木戸番にとって、木戸銭の代わりに黄色のトマトを渡すことがただ子供の悪戯にしか見えない、それに大人が子供に馬鹿にされるのはたまらないことだ。ペムペルのほうから見れば、自分の大事なものを渡したのに、こんなひどい目に遭うとは思ってもいなかっただろう。しかも、完全に大人の世界から払い去られたのだ。

ここまで来て、ペムペルたちの頭の中で大人と子供の対立の構図は成立に至っただろう。

川村による作品の筆写時期とほぼ同時期に出版された賢治の童話集『注文の多い料理店』の広告チラシに、大人と子供についての具体的な構図が見られる。

これら(『注文の多い料理店』所収作品——筆者注)は決して偽でも仮空でも窃盗でもない。

多少の再度の反省と分析とはあっても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんな馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。

これら(同前)は正しいものゝ種子を有し、その美しい発芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道徳の残滓を色あせた仮面によって純真な心意の所有者たちに欺き与へんするものではない。

ここで、賢治は「卑怯な成人たち」と対照的に、子供達を「純真な心意の所有者」と見ている。つまり、賢治の中で成立していた大人と子供の構図は「卑怯」と「純真」との対立である。

杉浦静はこのような構図をもって本作品にかぶせ、「ペムペルとネリの物語は、いうならば、『純真な心意の所有者』が『純真な心意』のままで、『卑怯な成人』の世界に入っていこうとし、傷つけられる物語」だという見解を示した¹²。これは妥当な解釈だと思われる。黄金と思いこみ、ずっと大事にしてきた黄色のトマトを木戸銭として差し出そうとするペムペルの行為は確かに、「純真」な心で、自分の世界を出会った世界の原則——木戸銭を払ってから、サーカスが見られるという交換原則——に合わせようとしたのである。しかし、その木戸番は、子供の純真な気持を受けとめようともせず、貨

¹¹ 杉浦静「『黄いろのトマト』試論」(萬田務・伊藤真一郎編『作品論 宮沢賢治』 双文社 1984、7) 76頁

¹² 前掲「『黄いろのトマト』試論」79頁

幣の代わりに黄色のトマトが渡されたことを子供に馬鹿にされたと思いこみ、大人の面子を保つ為に、子供相手に暴力まで振るってしまった。彼のこのような行為は傲慢のように見えるが、内面は「卑怯」だというしかないであろう。以上述べてきたように、二人はこうして子供と大人の差異を認識させられたのである。

また、前述のようにペムペルとネリは自給自足の農耕生活を営んでいた。「はたけにトマトを十本植ゑてゐ」て、うちの五本が真っ赤で大きな実を実らせるポンデローザで、残る五本は「さくらんぼうほどの赤い実」が出来るレッドチェリーである。ある年、実る季節になると、赤い実が出来るはずのレッドチェリーの中の本に黄色の実が出来た。ペムペルとネリはそれがただの変種であることを知る由もなく、「ギザギザの青黒い葉の間から、まばゆい」くらい光るのを見て、それを「黄金」¹³だと思ひこんだ。

大塚常樹は「賢治は詩の『亜細亜学者の散策』の中で、黄金には、資本主義的ないわゆるお金と、仏様の身体の色に使われる聖なる黄金（古金）の二つあると述べています。（中略）つまるところ『黄いろのトマト』もこの二つの黄金の対比を書いた作品」¹⁴だと指摘した。確かに、「亜細亜学者の散策」を見ると、「私が名指す古金とは／今日世上一般の／暗い黄いろなものではなく／竜樹菩薩の大論に／わづかに暗示されたるもの」（下線——筆者注）とある。また、その発展形とも言われる詩「葱嶺先生の散歩」でも、「同じい純粹の黄金とは云へ／今日世上交易の／暗い黄いろのものではなく」（下線——筆者注）と、更にはっきりと二つの黄金の意味の一つが資本主義的なもの——金貨であることが示されている。

ここで注目したいのは、賢治は上記の二つの詩のなかで、黄金には二つの意味があることを示したと同時に、その二つの意味の使い分けも示唆してくれたということである。それは聖なるもの、光＝〈光る黄金いろ〉と資本主義的なもの、金貨＝〈暗い黄いろ〉の使い分けである。

作品「黄いろのトマト」に戻ると、ペムペルが黄色のトマトを黄金だと思ひこんだのは、それが黄色のためのみならず、むしろ、「『黄金だよ。黄金だからあんなに光るんだ。』」とその黄色のトマトが「たいへん光る」ためでもあろう。また、ペムペルとネリの二人だけの世界は、自給自足の農耕社会なので、交換のために生産された商品はない、商品交換の際に発生する貨幣もない。（勿論、交換という行為がないとは言えないが、せいぜい物物交換であろう。）ゆえにペムペルが思っていた黄金の意味は、資本主義的なもの、〈暗い黄いろ〉の貨幣ではないことは判断できるだろう。

とはいえ、大塚常樹が指摘したような、仏様を象徴する聖なるものの意味と判断するのもやや早計であろう。少なくとも「黄いろのトマト」においては、あからさまに仏教を匂わせるものは見当たらない。むしろそれは、光輝く自然物としての黄金そのものを意味するだろう。ただし、それはまだ貨幣にされる前段階の黄金である。なぜなら、自然の状態の黄金を特別な商品（一般的等価物）貨幣にする資本主義の社会環境がないからである。

しかし、ペムペルとネリが出会った世界は、すでに、自然物の黄金を貨幣にした資本主義の商品世界である。そこではペムペルたちの自給自足の世界とは違って、すべてのものが売るために生産され、

¹³ 前記の『新修全集』第9巻の本文では、「黄金」に「きん」、とルビをふっている。が、『新校本全集』第9巻校異篇によると、草稿段階では、ルビがふられていないゆえ、『新校本全集』の本文もルビは採用されていない。本稿はルビをふっていない『新校本全集』の本文をテキストにしているが、ペムペルが木戸の外で見た人々が出したのも「黄金」と表現されているから、ルビがなくても筋の展開には障害がないと見ている。

¹⁴ 大塚常樹「解説」（『ポラーノの広場 ^{ひろば}〈角川文庫 I 0044〉』角川書店 1996、6）228頁

社会の住民はそれらを買って消費することによって生活している¹⁵。また、商品交換の際には、媒介物として貨幣が用いられる。ペムベルが見た町の人々の出した「銀か金のかけら」は銀貨、金貨のことであり、サーカス観賞も商品消費の一種である。

貨幣交換はおろか、あってもせいぜい物物交換のレベルである自給自足の世界から来るペムベルは黄色のトマトを黄金そのものと思いこみ、それでサーカス場内に入ろうとしたが、勿論ただのトマトと判断され、入場を拒否された。物物交換の世の中であれば、黄金とでなくても交換不可能でもないが、貨幣商品的な世界では、その交換は不可能である。

こうして、ペムベルたちは自給自足的な文化と貨幣商品的な文化との差異を認識させられたのである。

以上のように、ペムベルたちは外の世界に出て、今まで見たことのない人や物事に会い、今までにない体験をした。そしてこれらの体験によって、さまざまな差異を認識させられた。ただし、注意しておきたいのは、これらの差異はペムベルたちの出会いによって生成したのではなく、もともと存在していたものであるが、彼らがそれまで外の世界と接触しなかったため顕在化されなっただけである。

四

まず、次の場面から見てみよう。

それから二人はだまってだまってときどきしくりあげながら、ひるの象について来たみちを戻った。

それからペムベルはにぎりこぶしを握りながら、ネリは時々唾をのみながら、樺の木の生えたまっ黒な小山を越えて、二人はおうちに帰ったんだ。

これはペムベルたちが心を痛めた体験をして、家に帰る場面である。

二人は「だまって」帰る途中、様々な思いが胸中に去来していたに違いなかるう。それはただ蜂雀が言う悲しさのみなのか。ペムベルは「にぎりこぶしを握りながら」、ネリは「唾をのみながら」、という二人の行為からは、悲しさのほかに一種の悔しさの暗示も読み取れるだろう。

ここで注意しておきたいのは、二人の帰還は侮辱を受けたためではないということである。前述のように、二人はたまたま奇妙な音に惹かれ、その音の正体を知りたいというただの好奇心に駆られ、音について出ていったのである。つまり、今までの世界に対する反動から出たわけではない。したがって、この帰還は元からの予定であったと言ってもよかろう。が、たまたま外の世界で痛い体験をさせられたため、予定通りの帰還は傷心体験後の帰還にもなった。

このように二人は心を痛めて家に帰ったが、その後はどうなるだろうか。あまりの悲しさや悔しさに、二人は今までの愉快的な生活を再び送ることなく、いわば、楽園の崩壊を迎えることになるかもしれない。蜂雀が「あゝかあいさうだよ。ほんたうにかあいさうだ」と言った言葉はこの悲惨な結末を意味するだろう。

が、一方、二人は外でいろいろの差異を認識させられたことによって、今まで意識しなかった自分たちの世界が楽園であることが認識され、この楽園での幸せな生活を前よりも大切に、引き続き愉

¹⁵ 横山正彦・金子ハルオ編『マルクス経済学を学ぶ』（有斐閣 1995、5 新版第7刷）2～3頁参照

快な毎日を送る、というハッピーエンドの可能性はないこともなからう。

このように、ペムベルたちの話の行方は幸か不幸かという二つの相反する可能性を持っている。にもかかわらず、その話の語り手である蜂雀は「かなしい」、「かはいさう」と、一つの方向に話を決め付けようとする。聞き手である幼少時の「私」も蜂雀に引っ張られ、「かなしくな」った。が、その話の外側にいる成人後の「私」が、末尾を「私のまだまるで小さかったときのことです」という一句で締めくくり、聞いてきた話のすべてを過去の時空に封じ込んだ。今現在の「私」にとって、小さい頃蜂雀から話を聞くということ自体、また、その話の中に出てくる二人が居る現代風の楽園も、みんな夢のようなもので、現実には居る「私」とは一線を画している。

このような多重の入れ子型の構造を設定する作者賢治は、おそらくその現代風の原始的な楽園を夢見つつも、その夢の脆さも感じているだろう。

以上のように、本稿はテキストや作品成立時期を検討した上、三つの視点から検討を加えてきた。まず、ガラス、トマト、キャベツなどをキーワードにし、ペムベルとネリが住んでいる場所の特徴を分析することによって、そこは精神的な面からいえば、純粹に子供しか存在しないイノセンスの世界であり、物質的な面から見れば、自給自足の原始的生産方式をとっていながらも、ハイカラな雰囲気が漂っている、いわば現代風の原始的な楽園であることが窺えた。しかし、ペムベルたちは好奇心に駆られ、そこを出てしまった。二人は外の世界で、心を痛めた体験をして、子供と大人の対立、自給自足的文化と貨幣商品的な文化の差異などを認識させられ、さまざまな思いを抱えて、もとの楽園へ帰った。その後の行方は語られなかった。その結末は「幸」又は「不幸」いずれの可能性もあるだろう。作品が多重の入れ子型の構造を採っていることによって、ペムベルたちの物語と、それを語り聞く話とが、すべて過去の時空に封じ込まれた。その現代風の原始的な楽園の行方を知る由はなく、読者はすべてを一つの夢として見るしかない。作者が複雑な構造を設定するのはその楽園の話があくまでも夢であることを十分承知しているからであろう。

※ 賢治が書いたものの引用は『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房 1995、6）によるものである。